

# 愛知県における コムギ黄斑病防除対策技術



2026年3月

愛知県農業総合試験場  
環境基盤研究部病害虫研究室

# 防除体系

	時期	薬剤	FRAC コード	備考
(必要に応じて)	茎立期前	アゾキシストロビン水和剤	11	初発が早く暖冬傾向の場合や連作多発ほ場 目安：発病株率30%以上
<b>【必須】</b>	茎立期～止葉展開期	プロピコナゾール乳剤（地上散布）または メトコナゾール水和剤（空中散布）	3 3	多発リスクが高い場合は早期に
<b>【必須】</b>	開花始期～開花期	ピジフルメトフェン水和剤	7	
(必要に応じて)	開花期20日後ごろ	テブコナゾール水和剤または チオファネートメチル水和剤	3 1	赤かび病の多発リスクが高い場合

- ・ **茎立期前の2月上中旬に発病株率が30%以上ある場合は、アゾキシストロビン水和剤を散布しましょう。**
- ・ **【必須】 茎立期～止葉展開期**にプロピコナゾール乳剤（またはメトコナゾール水和剤）を散布しましょう。小麦連作ほ場など多発リスクが高い場合は、初発確認後早期に散布しましょう。
- ・ **【必須】 開花始期～開花期**にピジフルメトフェン水和剤を散布しましょう。
- ・ 開花期以降の気象により、赤かび病の多発リスクが高い場合は、追加でテブコナゾール水和剤、またはチオファネートメチル水和剤を散布しましょう。
- ・ 夏期に**2ヶ月以上の湛水**または**石灰窒素70kg/10a施用し2週間湛水**することで、初期の病気の進行を遅らせることができます。薬剤防除だけでなく、ほ場内の菌密度を下げるため耕種的防除も取り入れていきましょう。

## ○注意するポイント

- ・ 薬剤防除する際は、同じ系統の薬剤を連用せず、ローテーション散布しましょう。
- ・ 夏期に湛水処理を実施したほ場は、連作ほ場と比べ排水性が劣る可能性があります。排水対策を徹底し、ほ場の状況をよく確認してから播種するようにしましょう。
- ・ 石灰窒素を散布する場合は、減肥を検討して下さい。
- ・ 農薬の使用に当たっては、ラベルの記載に従って使用し、飛散に注意して下さい。
- ・ 登録情報は2026年3月現在のものです。

## ○背景・目的

コムギ黄斑病は前作で発病した残さ上に作られた偽子のう殻中の胞子が最初の伝染源となり、降雨により胞子が飛散し、コムギ葉上で発病します（図1）。コムギを連作すると第一次伝染源である前作の残さが残ることで、発病しやすい環境になります。発病が進むと止葉を含む上位葉が早期に枯れ上がり、収量や品質の低下につながります（図2）。

そこで、薬剤防除も含めた防除体系の確立を目的に試験を実施したので、その結果についてまとめました。



図1 前作残さ上の偽子のう殻

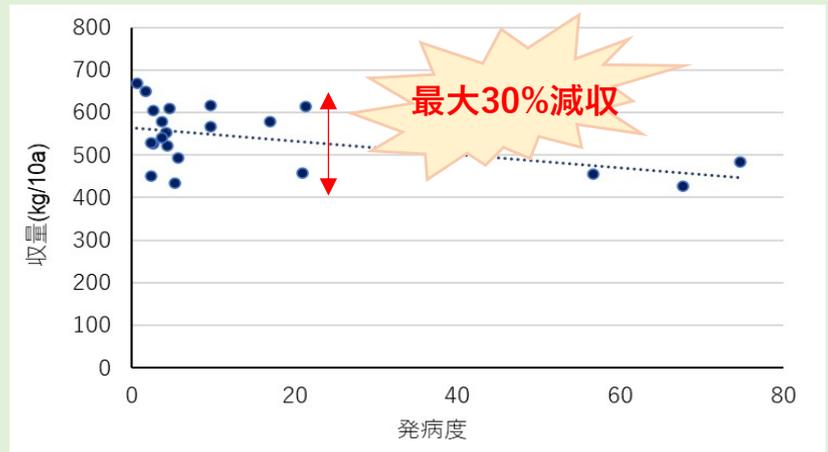


図2 発病度と収量の関係

発病度 =  $\{\sum(\text{程度別発病葉数} \times \text{指数}) \times 100\} / (\text{調査数} \times 5)$

発病指数 0:発病無し、1:病斑1~2個、2:発病面積10%未満、3:発病面積10~30%、  
4:発病面積30~50%、5:発病面積50%以上

## ○各試験の結果

### 1. 防除薬剤の種類

既発条件下で、防除薬剤の効果を調査した結果、下図の3剤において防除価41以上の効果が確認できました。なお、防除価は41以上で実用性有と判定されています（新農薬実用化試験）。特に、**プロピコナゾール乳剤の1,000倍**および**ピジフルメトフェン水和剤の1,500倍**の散布が高い効果を示しました（図3）。

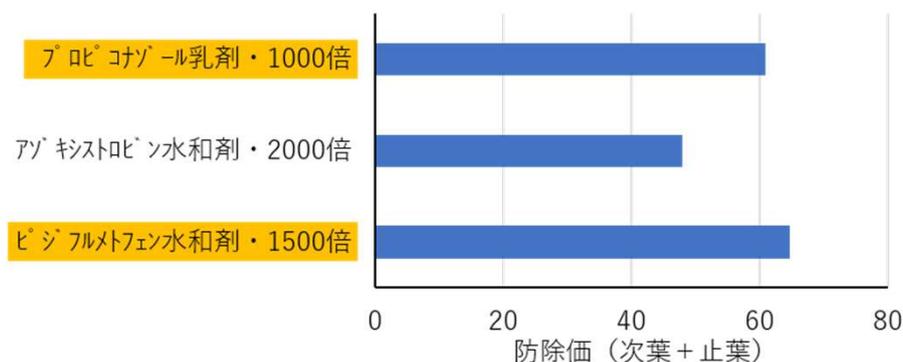


図3 薬剤散布試験結果

2021年11月15日播種 きぬあかり、次葉に既発条件下で試験  
2022年4月11日（出穂前）に散布、展着剤加用

## 2. 防除時期

表1のとおり開花期防除に加え、プロピコナゾール乳剤を発生初期～止葉展開期に散布し、防除効果を比較しました。

表1 防除時期の検討試験

区名	処理時期および薬剤			
	発生初期 (2月17日)	茎立期 (3月16日)	止葉展開期 (3月29日)	開花期 (4月11日)
発生初期+開花期	プロピコナゾール乳剤			ピジフルメトフェン水和剤
茎立期+開花期	プロピコナゾール乳剤			ピジフルメトフェン水和剤
止葉展開期+開花期	プロピコナゾール乳剤			ピジフルメトフェン水和剤
開花期	ピジフルメトフェン水和剤			
無処理				

その結果、

**「開花期」+「それ以前」の2回防除**で高い効果が認められました。

1回目の散布時期は止葉展開期→茎立期→発生初期の順に効果が高い結果でした(図4)。

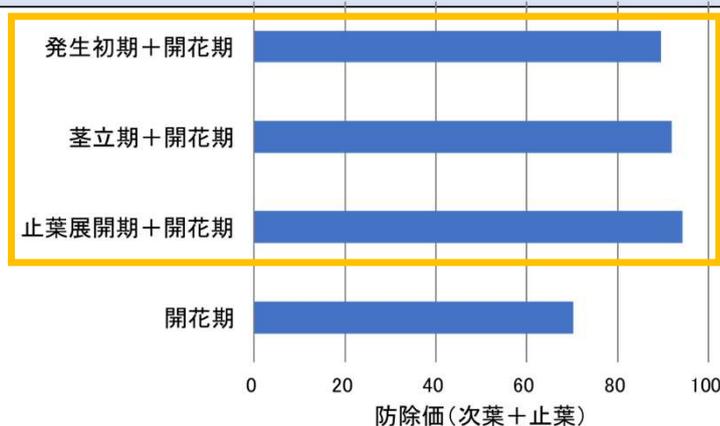


図4 防除時期検討試験結果

2022年11月15日播種 ゆめあかり  
2023年2月17日(発生初期)、3月16日(茎立期)、3月29日(止葉展開期)、4月11日(開花期)に散布展着剤加用

## 3. 夏期湛水処理

コムギ収穫後にコムギ残さをすき込み、7~9月に湛水処理期間を変え、次作のコムギの発病度を比較した結果、**2ヶ月以上の湛水**または、すき込み直前にコムギ残さの腐熟を促進するため**石灰窒素70kg/10a施用し2週間湛水**することで、開花期においても止葉への発病を抑えることができました(表2)。

現地ほ場調査でも、夏期に1ヶ月以上湛水したほ場や水稻刈跡ほ場では、コムギ連作ほ場に比べ発病度が低く抑えられていました(図5)。

表2 夏期湛水処理期間による発病度の違い

区名	開花期発病度				
	止葉	次葉	3葉目	4葉目	平均
①2週間湛水	2.7	2.0	5.7	38.0	12.1
②1ヶ月湛水	0.3	1.0	5.7	32.0	9.8
③2ヶ月湛水	0.0	0.0	1.0	14.3	3.8
④2週間湛水+石灰窒素	0.0	0.3	0.3	11.3	3.0
無処理	4.0	6.0	15.7	57.3	20.8

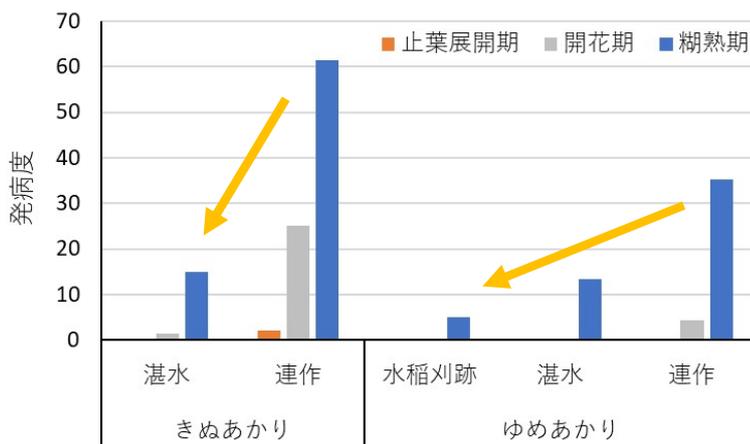


図5 現地ほ場における夏期湛水の効果

## 4. 多発ほ場における対策

前作で黄斑病が多発したほ場や、初発が早く暖冬傾向の年は、2回防除では発病を抑えられない場合があります。連作ほ場において、**2月中下旬にアゾキシストロビン水和剤を追加散布**した場合の効果を検討した結果、水稻刈跡区と同等に黄斑病の発病を低く抑えることができました（図6）。

**2月上中旬に発病株率が30%以上の場合は**、茎立期前にも薬剤散布を行いましょう。また、茎立期前に発病が見られない場合も、初発確認後は早めに防除を行いましょう。

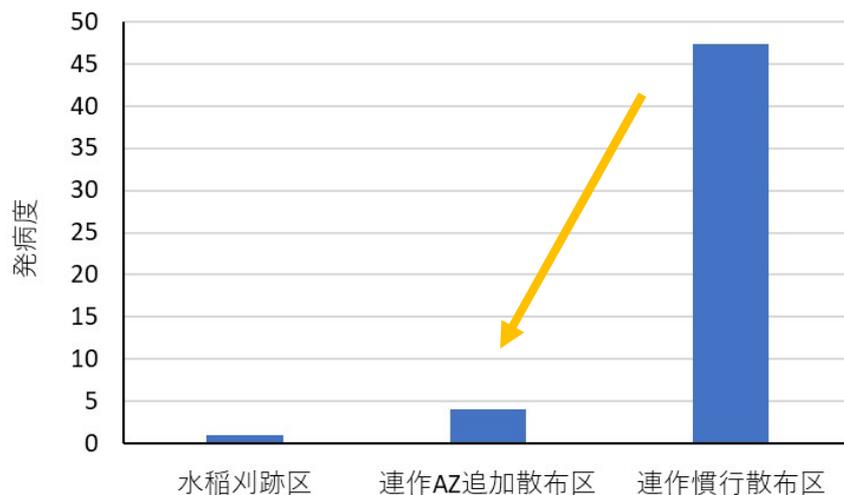


図6 多発ほ場におけるアゾキシストロビン水和剤散布の効果

水稻刈跡区、連作慣行防除区防除履歴：2025年3月 1日 プロピコナゾール乳剤  
4月26日 テブコナゾール水和剤  
4月28日 ピジフルメトフェン水和剤  
連作 A Z 追加散布区：連作慣行防除区 + 2月20日 アゾキシストロビン水和剤

愛知県農業総合試験場  
2026年3月作成

問合せ：環境基盤研究部 病害虫研究室  
TEL：0561-41-9514  
MAIL：nososi@pref.aichi.lg.jp